

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：62608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24820073

研究課題名(和文) 賀茂真淵の『金槐和歌集』評注とその受容に関する研究

研究課題名(英文) Research on Kamo no Mabuchi's commentary on the Kinkai wakashu and its reception

研究代表者

高松 亮太 (TAKAMATSU, Ryota)

国文学研究資料館・研究部・機関研究員

研究者番号：20634538

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円、(間接経費) 690,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近世期を代表する和学者賀茂真淵が評注を加えた系統の『金槐和歌集』諸本について網羅的な調査を行い、系統分類を試みるとともに、その伝播状況を考察し、近世後期から明治初期までの真淵学受容の実態を把握する足掛かりとした。

その結果、真淵の評注が数度に亘るものであったこと、また伝播の過程で書き換えや加注が行われたこと、注が変容していくさま、加注に関与した人物、茂吉の実朝研究における諸本の位置付けなどについて新たな知見を加えることができた。また、その作業を通して、真淵の孫弟子上田秋成やその周辺の万葉学などの諸活動を跡付けられたことも重要な成果であった。

研究成果の概要(英文)：In this research, I have clarified how Kamo no Mabuchi's studies were received from the latter part of the Edo era to the Showa period. In order to do so, I have systematically classified and verified the propagation of the various existing copies of the poetry anthology of Minamoto no Sanetomo Kinkai wakashu (The Collection of the Kamakura Ministry of the Right), which was compiled after his death in 1219 and widely studied during the Edo period.

Through this research, it could be shown that Mabuchi added to his commentary many times, and also that alterations and annotation were added during the process of propagation. A special point of focus is the collection of the noted modern poet Saito Mokichi (1882-1953), and his research on Minamoto no Sanetomo. Further, through this research, it was possible to follow the activities of several second-generation pupils of Mabuchi, such as Ueda Akinari and scholars around him.

研究分野：日本近世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国学 金槐和歌集 源実朝 和学 賀茂真淵 上田秋成 斎藤茂吉

1. 研究開始当初の背景

賀茂真淵の古典研究は、その名声に比して大きく立ち遅れていると言わざるを得ない。夙に、小山正『賀茂真淵伝』(春秋社、1938)や、井上豊『賀茂真淵の学問』(八木書店、1943)、同『賀茂真淵の業績と展開』(風間書房、1966)、山本嘉将『賀茂真淵論』(初音書房、1963)など、昭和初期から中期にかけて盛んに行われ、一定の蓄積が備わる真淵研究ではあるものの、真淵の古典研究が極めて多岐に亘るにも関わらず、従来の研究は伝記研究や思想研究に偏りがちであり、かつ焼直しにすぎない憾みが少なからずあった。古典研究に限ってみても、古典テキスト利用から真淵の思想へと帰納させ、学問観や古典観を浮き彫りにしようとする研究が主流となっており、真淵が古典テキストと如何に向き合ったのかを具体的に解明しようとする研究は、必ずしも多いとは言えない。近時、原雅子『賀茂真淵攷』(和泉書院、2011)が上梓されたほか、高野奈未による一連の論考も現れ、上記のような逼塞した研究状況を打破すべく、真淵の古典研究と真摯に向き合う研究が見出せる。また、天野聡一によって真淵の『源氏物語』研究の実態も解明されつつあるなど、近時漸く真淵研究の必要性が見直されてきている。

だが、真淵の歴大な和学上の営為に比すれば、従来研究対象とされてきた古典テキストは極めて些少に過ぎない。また、真淵自身のみならず、門流や交友関係などの周辺の動向、また後代への影響などについても、より詳細な検討が進められてしかるべきであろう。本研究の軸となる真淵の『金槐和歌集』研究は、数種類残る真淵の実朝論や草稿からも、真淵の情熱が注がれたことは疑いなく、それが後代に与えた影響の大なることも、五十点以上の現存が確認できる真淵評注本系統『金槐和歌集』や正岡子規ら近代歌人の実朝顕彰運動からも明らかである。だが、これらの業績については、山本嘉将「真淵の実朝顕彰」(前掲書所収)を除いて、従来正面から取り上げられたことはなかった。

2. 研究の目的

本研究は、真淵の実朝評価の内実を明らかにするとともに、その成果が近世中後期の和学界や近代短歌の世界において、如何に受容され、如何なる展開を見せたのか。その具体相を明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の事柄について検討する。

(1) 真淵がどのような歌を評価していたのかを、その評を分析することで明らかにしていく。

(2) 真淵が評注を施した系統の『金槐和歌集』諸本を、書入内容、丸印、識語などによって幾つかの系統に分類し、不明瞭なままにある諸本の成立過程と伝播状況を明らかにする。

(3) 正岡子規やアララギ派歌人の歌論を精

査し、近世中後期和学界の実朝や、同じく万葉歌人として評価される田安宗武の評価との関連性や相違点(独自性)を明らかにする。
(4) 齊藤茂吉旧蔵資料の中から見出し得た、真淵評注本系統『金槐和歌集』や茂吉校本『金槐和歌集』などの諸本約30点を調査・整理し、茂吉の実朝研究における諸本蒐集の意義を明らかにする。

3. 研究の方法

まず、天理大学附属天理図書館に所蔵される真淵の実朝論稿本類の数種について調査を行うとともに、各地の図書館や所蔵機関に五十点以上残る真淵評注本系統『金槐和歌集』の諸本を調査し、そこに付される実朝論と草稿類との比較、実朝論同士の比較を通して、真淵が実朝の如何なる点を評価していたのかを炙り出す。

さらに、真淵評注本系統『金槐和歌集』の諸本に書き入れられた、丸印と真淵によるとされる評注の相違などをもとに、諸本をいくつかの系統に分類し、どの文壇にどの系統の『金槐和歌集』が伝わったのかなど、真淵評注本系統『金槐和歌集』の伝写過程について整理を施す。加えて、斎藤茂吉旧蔵資料から見出された真淵評注本系統『金槐和歌集』の調査・整理を通して、茂吉やアララギ派歌人たちの実朝をめぐる活動と創作活動との関連を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 平成24年度の成果

平成24年度はまず、真淵評注本系統の『金槐和歌集』諸本の渉猟とその整理、系統分類に努めた。資料調査に訪れた主な機関は、大阪府立中之島図書館(大阪市)、広島大学図書館(東広島市)、阪本龍門文庫(吉野郡)、浜松市立中央図書館(浜松市)、秋月郷土館(朝倉市)、岡山大学附属図書館(岡山市)、西尾市岩瀬文庫、お茶の水図書館(現石川武美記念図書館、千代田区)、無窮会図書館(町田市)などである。これらの調査成果を整理することによって、諸本の流通・伝播状況などが明瞭に知られるようになってきた。特に、真淵門人林諸鳥や真淵に私淑していた大菅中養父らの写本が見出され、真淵からさほど時代が下ることのない評注の存在が確認されたことにより、真淵の加注や抜粋活動は数度に亘るものであったことが分かってきたこと、および後代の和学者たちが真淵の加えた丸印とともに、各自の見解によって丸印を書き加え、それが真淵の印と誤伝されていった様相などが明らかになったのは、大きな成果であった。

上記の資料調査を行う一方で、真淵が実朝に言及している初期の著書『国歌八論余言拾遺』や『国歌論臆説』から、『歌意考』、「鎌倉右大臣家集のはじめにしるせる詞」、書簡までを、前代や同時代の実朝評価と比較することにより、真淵の実朝評価の内実とその意

義を炙り出す作業も同時に行った。その結果として、真淵壮年期における実朝評価は、前代あるいは同時代の人々の実朝評価と同断と見なし得ること、真淵の古典研究における実朝研究は『万葉集』研究の深まりとともに、比重が増していったことなどを明らかにした。加えて、真淵紀行の生成過程と受容を考察することで、『金槐和歌集』伝播の補助線とするとともに、より広く真淵学の伝播を考察する足掛かりとした。

(2) 平成 25 年度の成果

平成 25 年度は、まず前年度に引き続き、真淵評注本系統『金槐和歌集』の諸本の収集と整理を進めた。資料調査に訪れた主な機関は、成田山仏教図書館（成田市）、天理大学附属天理図書館（天理市）、掛川市立中央図書館、同市立大東図書館、豊橋市中央図書館、立教大学図書館（豊島区）、東京大学総合図書館（文京区）などである。上記各機関への調査では、必要に応じて写真撮影および複写を行い、それらの分析を通して、諸本の流通状況をより明瞭にすることに努めた。

諸本の全体像については、所蔵機関の都合などで調査が叶わなかった資料を除き、現在知られている、あるいは新たに知り得た資料約 70 点の調査をほぼ完了した。それらの分析によって、真淵による実朝評の系統分類、各系統の特徴、伝播に関与した人物などを明らかにし、真淵評注本系統の流布と、その過程における評注および合点の変容のさまを追い、各文壇における真淵学受容の一端を明らかにした。また、アララギ派歌人にして、実朝研究の先駆者の一人である斎藤茂吉は、『金槐和歌集』を 20 点以上所有していたことで知られるが、その茂吉旧蔵本を調査することで、真淵評注本の近代における流布の様相と、茂吉の実朝研究における真淵評注本の位置付けを試みた。

本研究の目的は、真淵評注本の近世後期から近代における受容を明らかにすることはもちろん、その検討を通して、近世後期の万葉学受容の様相を分析するところにあった。その意味では、上記真淵評注本の分析にとどまらず、真淵の孫弟子上田秋成や、その周辺の和学者たちの諸活動を跡付けられたことも本研究の重要な成果であった。

(3) 具体的な成果内容

真淵評注本系統『金槐和歌集』の系統分類と伝播の諸相

まず、真淵評注本系統『金槐和歌集』が、林諸鳥や楢取魚彦といった真淵直門の重鎮はもとより、村田春海、橘千蔭、小山田与清、前田夏蔭といった江戸派歌人、上田秋成、尾崎雅嘉、林鮎主、沢真風ら上方和学者、内山真龍や高林方朗など遠州和学者、また平田派や信州・岐阜といった中部地域に住む人々など、真淵流和学者を主としつつも、地域・身分を問わず、実に多彩な面々によって書写さ

れ続けてきたことが確認でき、その受容が想定していた以上に多方面に亘ることが明らかとなった。

また、貞享四年版『金槐和歌集』やその刊写本に綴じ込まれている真淵の実朝論（以下、真淵序）が、従来二種類あるという見解が主として行われていたが、諸本の伝播という観点から分析すると、宝暦五年三月、宝暦五年の異文、宝暦十年五月、宝暦十年五月異文の四種類に分類できることが明らかとなった。特に、その中の宝暦五年異文には、他の真淵序からは全く見出すことができない一条（題詠批判と実景・実情重視の主張が披瀝されている）が追加されており、それが彦根の和学者・漢学者の龍草廬の手にかかるものであること、その系統の本が大菅中養父や海量といった彦根の和学者から大坂へと伝わっていったものであること、後代には真淵のものであると誤解されていったことなどを明らかにし得た。

さらに、真淵は秀歌と判断した歌の上に「」「」などの合点を付けているが、その合点もヴァリエーションが豊富であり、諸本間で全てが一致するものはないほどである。その中には、初句が同じ語ゆえに目移りし、隣の歌に合点を付してしまったごとき、明らかな誤写も見受けられるが、それとは同断では扱うことが出来ない、三十数首もの相違が認められる系統の本があることが分かった。その諸本は、尾鷲市公民館中村山土土井家文庫蔵本や本居宣長記念館蔵本、神宮文庫蔵本など、一様に伊勢方面に伝わったものであることから、鈴屋派で書写された系統であることを指摘し、さらにその合点を付した人物は本居宣長ではないかと推測した。

上方における真淵の実朝評価の伝播

真淵の実朝評価は、如上の伝本調査から、上方にも広く伝わったことは明らかだが、上方での伝播には、主として真淵門の四天王の一人加藤宇万伎と、その門人の上田秋成が関与していることが明らかとなった。

秋成には、真淵評注本系統『金槐和歌集』全 719 首から秀歌 175 首を抜粋した『金槐和歌集抜萃』があり、現在秋成自身による転写本が京都大通寺に残っている。そこにはわずかに二箇所のみながら、秋成による自身の説の書き込みも見られるのだが、この書き込みが上方（特に京都）で書写され、伝わっていったことが確認できる諸本（無窮会図書館平沼文庫蔵本、鶴見大学図書館斎藤茂吉旧蔵資料、鹿児島大学図書館玉里文庫蔵本）の中から多く見出されるとともに、名古屋市蓬左文庫蔵『田安亜槐御歌』の林鮎主奥書から、鮎主も校合していたことが知られるなど、この『金槐和歌集抜萃』が上方で広く書写されていることが分かったのである。

さらに、文化 14 年（1817）に大坂で刊行された『和歌類葉集』なる書は、源頼政、藤原清輔、源実朝の家集の歌を分類した類題集

であるが、源実朝の歌については、該書が底本としたものが、『金槐和歌集抜萃』の転写本であることが、秋成説をそのまま刊本にも掲載していることから明らかとなり、秋成を介して上方に広がった真淵評注本系統『金槐和歌集』は、出版されることによって、更なる広がりを見せたのであった。

そして、その万葉調歌人としての実朝評価は秋成以後、同じく万葉調歌人として評価されていた田安宗武の評価とともに、近世後期の真淵流和学者たちに継承され、近代に入り正岡子規の実朝・宗武評価を生む素地を作ったと推測した。

斎藤茂吉の旧蔵資料と蔵書の形成

近代のアララギ派歌人として著名な斎藤茂吉は、『源実朝』を著すなど、実朝研究においても、著しい成果を残した。このたび、斎藤茂吉旧蔵の真淵評注本系統『金槐和歌集』が鶴見大学図書館および立教大学図書館に所蔵されていることが分かり、それらを全て調査し、その蔵書形成の過程を炙り出した。

その結果、蔵書の形成のされ方として、書店からの購入、知人からの譲渡、所蔵機関での書写という、概ね三つの方法で行われていたことが分かった。書店は本郷の琳琅閣書店、「大阪」から買い求めたものであること、譲ってくれた知人としては、小野寺八千枝夫人、阿倍次郎、岡田真、窪田空穂などであること、書写は静嘉堂文庫で行っていることなどが明らかとなった。今後は、この蒐集活動と茂吉の実朝研究の関連を深く追究していくことが、課題となる。

真淵学の受容と真淵流和学者たちの諸活動

真淵の実朝研究は、それ単体で行われたわけではなく、晩年顕著になってくる万葉主義との関連の中で行われたものである。そういった事情を考慮し、本研究の目的は、真淵評注本系統『金槐和歌集』の近世後期から近代における受容を明らかにすることはもちろん、その検討を通して、その背後にある近世後期の万葉学受容の様相を分析するところにあった。その意味では、上記真淵評注本の分析にとどまらず、真淵の孫弟子上田秋成や、その周辺の和学者たちの諸活動を跡付けられたことも本研究の重要な成果といえる。以下、概略のみ述べていく。

まず、真淵学受容という観点から、真淵の紀行『西帰』『東帰』が近世後期の和学者たちにどのように受容されていたのか、という問題について考察を加えた。その結果、真淵紀行の写本は、「寛政改元仲夏／源盈」なる奥書を持つ系統と持たない系統に分類でき、「源盈」が江戸派和学者の安田躬弦であること、奥書を持たない系統が圧倒的に広く流布し、より原本に近い本文を有していることを明らかにしたうえで、上方における真淵紀行お流布状況と上田秋成と伴蒿蹊周辺を中心

に素描した。さらに、近世後期の人々の真淵紀行への言及を参照し、和文日次紀行の模範として、また地名考証として、評価され受容されていたことを明らかにした。

また、真淵流和学者たちの活動としては、真淵の『万葉考』を継承せんとして『万葉考槻乃落葉』を著した荒木田久老を取り上げ、久老が上洛した寛政十一年から享和元年までの間の万葉講義の実態について、寛政十一年の京洛の門人らに対する講義の記録といえる国文学研究資料館蔵久老説書入『万葉集』を提示して明らかにしたうえで、同年成稿の『万葉考槻乃落葉四之巻解』がその講義の成果を取り入れる形で成っていることを、特に門人を介した秋成説受容の観点から立証し、久老上洛時の『万葉集』をめぐる活動の一端を明らかにするとともに、学説が伝達される方法を具体的に提示した。

さらに、真淵の孫弟子秋成の門人にして、真淵評注本系統『金槐和歌集』を書写していた人物の一人林鮎主の諸活動を、上方文壇の中に位置付けることを試みた。特に、古書の蒐集・書写や秋成・宣長への従学、さらに京都の和学者たちとの交流によって、古学に傾倒していく様子を浮き彫りにした。加えて、周辺の人物たちと協力し、初学者向け狂歌書の出版に尽力する狂歌師としての姿をも具体的に描き出し、和学者というにとどまらぬ、多彩な文人としての姿を浮かびあがらせた。

加えて、秋成自身の万葉研究にも踏み込み、秋成に従学していた大坂の旧蘆庵社中の存在に注目し、彼らとの交流を跡付け、さらに新出の秋成書簡や万葉評釈書『金砂』の分析を交えながら、『金砂』が、従来言われていたような秋成自身の為の著作ではなく、大坂の旧蘆庵社中のために執筆されたものであったことを明らかにし、晩年の秋成文学と人的交流とが関わり合う可能性を探った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

高松亮太「真淵紀行『西帰』の生成をめぐって 付、『冠辞考』成立管見」(『鈴屋学会報』第25号、2012年12月) pp.1~15、査読有

高松亮太「荒木田久老の上洛と『万葉考槻乃落葉四之巻解』の生成 秋成説の受容をめぐって」(『日本文学』第61巻第12号、2012年12月) pp.23~33、査読有

高松亮太「林鮎主年譜稿 明和から寛政まで」(『上方文藝研究』第10号、2013年6月) pp.78~93、査読有

高松亮太「上田秋成と蘆庵社中 雅交を論じて『金砂』に及ぶ」(『近世文藝』第99号、2014年1月) pp.73~87、査読有

〔学会発表〕(計1件)

高松亮太「上田秋成と蘆庵社中 雅交を論じて『金砂』に及ぶ」(第3回人的交流研究会、2013年3月2日、西尾市岩瀬文庫)

〔図書〕(計1件)

高松亮太『和学者上田秋成の研究』(博士学位申請論文、立教大学、2014年)全378頁。
第1部第3章「真淵評注本系統『金槐和歌集』伝本考 - 上方における流布を中心に -」、第2部第2章「上田秋成の実朝・宗武をめぐる活動」を始めとする各章が本科研の課題と関わりを持つ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高松 亮太 (TAKAMATSU, Ryota)

国文学研究資料館・研究部・機関研究員

研究者番号：20634538